博士学位論文審査要旨

氏　　名	王　　麗
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 281 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位論文の題目	景徳鎮における製磁技術の変遷
論 文 審 査 委 員	主査　神奈川大学　教授　小　熊　　誠
	副査　神奈川大学　教授　安　室　　知
	副査　神奈川大学　特任教授　昆　　政　明
	副査　神奈川大学　非常勤講師　菊　池　健　策

【論文内容の要旨】

本論文の目的は、景徳鎮の製磁技術を製土技術（第二章）、成形技術（第三章）、装飾技術（第四章）、焼成技術（第五章）に分化して検討し、これらの技術について中国、日本、欧米の文献資料と現代における民俗学的なフィールド調査によって得た資料と比較して、各技術の変遷の状況を明らかにすることである。

本論文の目次については、以下の通りである。

序章
　第一節　問題設定
　第二節　先行研究
　第三節「製磁技術」概念の明確
　第四節　調査地の概要
　第五節　研究方法
第一章　景徳鎮製磁技術に関する文献資料の考察
　はじめに
　第一節　中国における景徳鎮製磁技術の記録資料
　第二節　日本における景徳鎮製磁技術の記録資料
　第三節　欧米における景徳鎮製磁技術の記録
　おわりに
第二章　景徳鎮における製土技術の変遷
　はじめに
　第一節　調査地の概要
　第二節　採掘技術の変遷
　第三節　精製技術の変遷
　第四節　製土技術をささえる道具の変遷
　おわりに
第三章　景徳鎮における成形技術の変遷

はじめに
第一節　概念の明確及び先行研究
第二節　調査地の概要
第三節　円器成形技術の変遷
第四節　円器の成形技術を支える道具の変遷
おわりに
第四章　景徳鎮における装飾技術の変遷
はじめに
第一節　先行研究
第二節　調査地の概要と調査対象
第三節　装飾原料の生産技術の変遷
第四節　絵付け技術の変遷
第五節　釉かけ技術の変遷
第六節　染付装飾道具の変遷
おわりに
第五章　景徳鎮における焼成技術の変遷
はじめに
第一節　先行研究
第二節　インフォーマントのプロフィール
第三節　匣鉢詰め技術の変遷
第四節　窯詰め技術の変遷
第五節　燃料の変遷
第六節　本焼き技術の変遷
第七節　焼成技術を支える用具および施設の変遷
おわりに
結章
第一節　前章の総括
第二節　変遷状況の特徴
第三節　変遷の要因への考察
今後の課題

景徳鎮の磁器は、「玉のような白さ」、「紙のような薄さ」、「鏡のような明るさ」、「磬のような快音」という 4 つのことわざがある。これはまた、景徳鎮の製磁技術を表現する。「玉のような白さ」をもつ磁器を作るには、原料となる良質な磁土が必要である。この製土技術は第二章で述べられる。「紙のような薄さ」をもつ磁器を作るには、レベルの高い成形技術が必要である。これは第三章で述べられている。「鏡のような明るさ」をもつ磁器を作るには、高いレベルの装飾技術が必要であり、これは第四章で述べられている。「磬のような快音」をもつ磁器は、高度な焼成技術が必要であり、これは第五章で述べられている。以上 4 つの技術について、清代、20 世紀初頭、現代と 3 つの時代に分けてそれぞれの技術の特徴を押さえ、その変化についてまとめた点が本論文の特徴と言える。

第一章では製磁技術についての文献資料を検討し、その分類、整理を行った。それらの資料の持つ特徴を考察し、信頼性がある資料を抽出した結果、『中国陶磁見聞録』、『陶冶図説』及び訳本で

ある『清国窯業調査報告書』を代表的な文献資料として抽出し、第二・三・四・五章での技術の歴史を整理する際基本的な文献として利用した。

第二章では、製土技術の変遷を採掘技術と精製技術に分けて論じた。さらに、精製技術の変遷について、粉砕、水簸、土の成形に分けて検討し、その施設及び道具についても考察した。特に、採掘道具と精製道具を細かく調査し、それらの道具がどのように継承されているかを検討した。その結果、作業の流れや施設からみて、現在の精製技術は、清代の記録及び『清国窯業調査報告書』と一致することが判明し、製土技術は多くが清代から継承されていることが分かった。但し、採掘技術、沈澱用の丸型の攪拌溜、漉込溜の利用技術については現在では伝承されていない技術であると考えられる。

第三章では円器の成形技術の変遷を水挽き技術、型押し技術、削り仕上げ技術、型作り技術、成形道具の変遷に細分化し、考察した。水挽き技術の変遷については、職人の作業の様子、技術のポイントを考え、姿勢、輪車の動き方、坯土の置き方、指の動き、水挽品の取り方、水挽品を置き方、収縮の判断の面から全面的に考察した。その結果、機械陶車による水挽き技術は伝承されなかったが、観光実演において完全伝承されていることを明らかにした。また、型押し技術の変遷については、型の材質形と寸法収縮から職人の生産状況まで多方面にわたり検討した。その結果、観光実演の現場において土型は碗用しか使用されなくなっていることが判明した。本章の最後には型押しのための水を塗布する技術、型押し用の陶車の使用技術、二回の仕上げといった技術は、現在では伝承されていないことを明らかにした。削り仕上げ技術の変遷については、荒削り、高台削り、削るための水を塗布する技術のポイントを考察した。成形技術を支える道具の変遷については、特に陶車の変遷について詳しく論じている。

第四章では、装飾の技術、特に施釉の技術と絵付け技術の変遷を論じた。釉かけ技術の変遷については各種類の釉かけ方法を全面的に考察した。結論として、盪釉、蘸釉、刷釉、交釉は現在において観光の実演として行われているものの、工場では全体的に衰退傾向にあることを明らかにした。また元明時代の製品を擬古品（複製品）として複製するため、その技術を使う場合も多くあることが判明した。吹釉は、ポンプ機の利用が一般的となっている。一方、碗における二回の釉かけ技術、口で釉薬を吹く技術は伝承されなかったことが判明した。絵付け技術の変遷については、筆をもつ、絵を写す、線描き、染めるという技術を中心に考察している。その結果、線描き、染める技術も現在まで完全伝承されていることが明らかになった。

第五章では、焼成技術を匣鉢詰め技術、窯詰め技術、本焼技術に分けて、その変遷を全面的に考察した。とくに匣鉢詰め技術のポイントである入れ方、力の加減、中の入れ物について論じた。窯詰め技術については、特に空間位置、位置管理に考察を加えた。また本焼技術について、実際に本焼に参加して実地調査を行い、焼火時間、焚口を閉める、下燃し、本燃し、焼成火候、テストピースを取り出す、灰を取る、窯だしについてまとめた。加えて、景徳鎮における伝統的焼成道具の全体像を確認し、代表的な窯道具である柴窯の変遷を分析した。

以上のまとめとして、結章において「製土技術」は完全伝承の技術と伝承しなかった技術の二種類によって構成されていること、「成形技術」と「装飾技術」は完全伝承の技術、変化しながら伝承される技術、伝承しなかった技術という三種類で構成されていること、「焼成技術」は変化しながら伝承される技術と伝承しなかった技術の二種類で構成されていることを整理した。そして、これらの技術の変化に関する要因として、消費者の立場と生産者の立場に分けて検討した。前者は、民衆の好みの変化、擬古品愛好家の存在、観光客のニーズに応じる技術の資源化という三つの要素を指摘した。後者は、現代的な設備と伝統的技術の双方を活用する職人や技へのこだわりを強く持つ職人など多様な生産者の存在が重要な要素となっていることを明らかにした。

景徳鎮において、その伝統製磁技術を伝承するには、若手技術者の育成において伝統的な徒弟制度と学校教育をあわせた育成制度を考える必要があるが、この点については景徳鎮における製磁業のこれからの課題であることを指摘した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、景徳鎮における製磁技術を製土技術、成形技術、装飾技術、焼成技術の 4 つに分け、この 4 つの技術について文献資料とフィールドワーク資料を検討することによってそれぞれさらに細かい技術について細分化して分析した点が高く評価できる。さらに、従来の研究は、製土から焼成までのすべての工程を全体的に考察した論文はほとんどなかった。景徳鎮の製磁技術を全体的にまとめた論文として、将来も研究上参考にされる好論文と言える。

製磁技術を研究する場合、成形技術から焼成技術について対象とすることが多いが、製磁の基本となる陶土を作る技術を取り上げた研究は多くないと思われる。磁石をどのように発掘し、さらにそれを粉砕し、水篩し、陶土を成形するまで実地調査に基づいた資料と写真によって各段階の技術を検討している。さらに、それぞれの段階で使用する道具についてもきめ細かく記述している。そして、本章の目的はそれぞれの技術と道具が、20 世紀初頭から現代に至る間にどのように継承され、あるいは変容しているかを論じている。この研究方法は、第三章の成形技術、第四章の装飾技術、第五章の焼成技術も同様であり、このように、きめ細かい技術と道具の調査をきちんと行い、その変容について論じている点は、研究方法と研究内容において高く評価できる。

第三章における成形技術の論考では、陶車の歴史的変化について多くの歴史的な図によってその変化を跡付けた点は、人力から動力への変化が明確に理解できる記述である。さらに、観光による実演で利用する陶車は、清代から 20 世紀初頭の人力による陶車を復元して使用しており、工場における技術の展開とは別に観光実演では伝統的な設備と道具が使われる。この景徳鎮における製磁の観光における技術を、製作者の技術との関連でどのように位置づけて考えるかをさらに検討する必要もあったかと思われる。しかし、観光から製磁の技術をみる視点は重要であり、この点を取り上げたことは景徳鎮の製磁技術の変容を全体的に考察するうえで重要な研究視点であると評価できよう。

第四章の装飾技術において、染付技術については釉薬の生産から釉かけの技術、そして染付装飾道具まで詳細に検討されている。しかし、もう一つの装飾技術である赤絵あるいは中国では五彩との呼ばれる色絵の技術について検討されていないので、今後の研究に期待したい。

第五章の焼成技術では、柴窯の変容やその燃料の変遷という焼成の施設や道具の検討から始まり、窯詰の変遷まで焼成作業の各段階の技術の変遷を細かく分析している。さらに、焼成の主作業である本焼き技術については、24 時間眠らずの作業に参加し、事細かく調査したことによって本焼きの実態が具体的に表現されており、本研究が実地調査によって理解できる生産者の「実践知」を汲み上げて技術の分析が行われているという研究視点が明確に理解できる。

本論文は、以上のように景徳鎮における製磁における製土、成形、装飾、焼成のそれぞれの技術をさらに細かな段階に分けてその変容を明らかにした。終章では、その変容について清代、20 世紀初頭、現代において①ほとんど変化しないで完全伝承されてきた、②変化しながら現代に伝承されている、③消滅して伝承されていないの 3 種類に分けて分類し、さらに現在の製作場面を①工場、②擬古（複製）品製造、③観光実演に分けてそれぞれの相違を比べている。問題は、これらがなぜ、どのように伝承され、変化し、消滅したかをそれぞれ分析することである。変遷の要因を、消費者側では民衆の好みの変化、複製品愛好家の影響、観光客のニーズとし、生産者側では現代的な設備

と伝統的技術の双方を活用する工場の存在、技へのこだわりを強く持つ職人の存在など生産者の多様性が影響を与えるとした。

本論文は、景徳鎮における製磁においてさまざまな技術を事細かく取り上げ、その変遷を調査し、さらにその理由を考察した好論文である。したがって、審査の結果、本論文は博士（歴史民俗資料学）の学位を授与するにふさわしいことが、審査員一同によって認定された。